
王子様といっしょ！

山城奈々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王子様といっしょ！

【Nコード】

N4758N

【作者名】

山城奈々

【あらすじ】

平凡な大学生の莉央は、ひょんなことから逃げ出した王子、レンと暮らすことに。ヘタレなレンにドキドキしちゃうけど、もう恋愛なんてこりこりだし…。

王子と大学生の恋愛ファンタジー。

王子、現る！

もう、恋愛なんてこりごりだ…。よわい 齢19年で、まさかそんなことを思い知らされるとは夢にも思わなかった。恋愛が、ドラマやマンガみたいに上手く行くわけないっていうのは、わかってる。みんなそう思ってるから、見ちゃうのかな。理想の恋愛を、登場人物に重ねているのかもしれない。

たはいえ、そう思っているにも関わらず、自分に都合のいい「脳内恋愛」を日夜繰り広げているのが最近のあたしなだけど。

三浦莉央、みづうりお 19歳。普通の大学生。

特に何かしたいという目標もなく、上京してきて早2年。もう、大學生活半分に差し掛かっている。

可もなく不可もなく…といった日常で、これはこれでいいんだけど、何か刺激が欲しいとも思う。

「彼氏でも作れば？」って友達に言われるけど、そんな気が起こるのは後何十年先になるのかわからない。あたしの「恋愛はこりごり」は相当な意味を含んでいるんだ。美咲はその辺のこと、よく察しているからそういう感じのことは何も言わない。

美咲と駅で別れてから、買い物をするために駅ビルに向かう。

買い物・ご飯・テレビ・お風呂・課題・就寝…であたしの今日は終わる。学校から帰ると、ほぼ毎日この繰り返し。この毎日の習慣がひっくり返っちゃうくらいの何かが、起こったらどうなるのかな。例えば、いきなり家に王子が転がり込んでくるとか…。1人暮らしだから、王子の1人くらいだったら、なんとかなるかも…。

今日のあたしの脳内恋愛のシナリオは、「王子ルート」に決定。
王子か…、めんどくさそう（笑）

ドンッ！

妄想にいそしんでいたあたしは、勢いよく何かにぶつかられた。

あたしを現実世界に引き戻したのは、同じ歳くらいの男の子。
ちよっとボサッとした黒髪。今流行り、とはいかないけどそこそこ

オシャレな服装。顔は、よく見えないけど、そこそこいい。

すみません…と言おうと口を開きかけた時、「ちょっと助けてくれない？」と男の子。

「え、ちょっと…、なんで？」と、聞き返した時には男の子に手を引かれて走り出していた。

ちよつとちよつと！なにこの展開！あたし、どうなっちゃうの？
てか、どこまで行くの？

駅ビルからちよつと離れた路地まで、あたしは連れて来られていた。

「急にごめんね。ちよつと追われててさ…」辺りを見回しながら、
男の子が続ける。「俺、レンって言っただ。さっきは助けてくれて
ありがとう。」

「どういたしまして。あたし、莉央。ね、なんで追われてたの？まさか
食い逃げ犯とか？」

「逃げていたのは事実だけど、そんな理由じゃないよ。」レンが笑
う。

うわ！笑うとくしゃつとしてて、かわいい…！一瞬ドキッとしたの
を悟られないように、あたしは我慢する。

「ね、莉央は俺がいいヤツか悪いヤツかって聞かれたら、なんて答える？」

出会って10分も経ってないんですけど！でも、悪いヤツには見えない。「どちらかと言えば、いいヤツかな？」

「そっかー。じゃあさ、オレのこと信用できるって少しは思ってるってことだよね？」

「うん…まあ…」レンは何が言いたいんだろう？

「実はオレ、王子なんだけどさ、少しの間一緒にいてもらっていいかな？」

なにこいつ！初対面の人にこんなこと言う？きつと新手のナンパとかそついう感じだ。ちよつとカツコイイからって、何言ってるの？一氣に心の扉にカギをかける。

「いや…そついうのはちよつと…」しかも自称王子とかちよつとやバイでしょ…。

あたしの様子がいきなり変わったのを察したのか、レンはちよつと慌てだした。

「いや、なんていうか結構マジな話なんだよね。これ、見てもらえ

る？」そついいながら、カバンから雑誌を取り出した。確か、今日学校で美咲が読んでいた雑誌だ。世界のセレブ特集っていう記事があつて、「やっぱお金持ちは違うね〜」って話してた。

「あ、このページ。」レンが開いたページは美咲と読んだ特集記事。半信半疑で写真を確認する。

…信じたくないけど、似てる。

よく見ると、今着てる服も雑誌のものと同じだ。

「これで信じてもらえた？」レンがいたずらっぽく笑う。

そのときだった。

「王子がいたぞ！」

誰かが叫んだ。

「あ、見つかった！」レンは駆け出そうとした

やっぱり本物の王子なんだ…！

逃げてる理由はよくわからないけど、助けなきゃやばいつて瞬間的に思った。

「レン、こっち！」今度はあたしがレンの腕を掴んで駆け出していた。

「え、助けてくれるの？」

「細かいことは後だよ！早くここから離れないと！」あたしは夢中でレンを誘導した。

幸い、夕方で少し薄暗くなっていたため、追っ手から逃げることはそんなに難しくなかった。

逃げることしか考えていなかったため、あたしは無意識のうちに自分のアパートに向かっていた。

「とりあえず、しばらくうちにいるといいよ。」あたしはレンを自分の部屋に入れた。追っ手に見つかるまでは不審そうだったあたしの様子が180度変わったので、今度はレンが少し困っていた。

「本当にいいの？」

「だって、捕まったらそこでおしまいでしょ？理由はよくわからないけど、放っておけなかったし…。」

「本当にありがとう。助かるよ。」レンはホッとしていた。

レンは、セシリア公国というヨーロッパの小国の王子らしい。日本とはあまり交流がないため、国の名前を知らなくても仕方ないらしい。黒髪と流暢な日本語は、おばあさんが日本人だったため、日本語を教えてもらったからだそうで、レンはクォーターになるそうだ。

「そういえば、追われてた理由を聞いてなかったね。」

「やっぱり言わないとダメかな？」レンがしょんぼりしだした。

「そんな言いにくいようなことなの？」

「うーん…そうでもないんだけど…。」王子なのに、なんかもじもじしている。「置いてもらうのに、言わないのはダメだね。」とつぶやくと、「実はさ…、婚約者がイヤで逃げてきたんだよね…。」

なにこのヘタレ王子！啞然としたあたしをよそに、レンは続けた。

「親同士が勝手に決めた相手だから、お互いのことをあまり知らないのに仕方がなく結婚…っていうのが納得できなくてね。無理矢理逃げてきたんだ。婚約を解消するって父上に言われるまで、俺は帰らないつもり。自分が勝手なことしてるっていうのはわかってる。だから、お願いします！しばらく莉央の家においでください。」

目を潤ませてお願いするレンに、またドキッとしてしまう。

婚約者からの逃亡は、ヘタレ王子の必死の決断なのかもしれない。

「莉央には絶対迷惑かけないからさ！お願いします。」

王子に必死に懇願される普通の女の子って、多分世界であたしだけじゃない？

それに、放っておけないって思ったから勢いとはいえ、家に連れてきてしまった。最後まで助ける責任もある。

「家に連れてきたのはあたしだし…。うん、しばらくいていいよ。」

「やった！ありがとう、莉央！」と、言いながら、レンはあたしに飛びついてきた。

レンに会ってから、ドキドキしっぱなしだ。これが、あたしが求めていた刺激ある生活なのかな？

脳内恋愛で描いていたシナリオ通り、あたしは王子と暮らすことになった。

王子、現る！（後書き）

1話目、ちょっと編集しました。

王子と過ごす休日

「うちにいてもいい」と言った時は夢中だったけど、よく考えれば「男の子と家に2人つきり」という状況になる。

…まあ、なんとかなるでしょ。

レンの部屋は、ほとんど物置化した部屋に決定した。あたしのアパートは部屋が2つあって、1つはあたしの居住スペースなんだけど、服とか使わないものしか置いてないその部屋は、寝るだけだったら十分なスペースがあった。

王子を元物置の部屋に寝泊りさせるとは…という感じだけど仕方ない。

「うわ、ホテルの部屋よりも狭い！」今日から自分の寝起きする部屋を見て、レンが驚いた。

「こういうところで寝るのって、なんかわくわくするねー。」と、とりあえず喜んでるみたいだったので、よしとした。
レンは疲れのせいか、部屋に入るとすぐ寝てしまった。

それにしても、レンはこれから追われるのかな。今日はなんとか巻くことが出来たけど、このままバレずに家に置いておくのは難しい。婚約者は、レンが逃げたこと知ってるのかな。

追っ手と婚約者から逃げてるレン。奥の部屋でのん気に寝てるけど、これからどうするかとかちゃんと考えてるのかな。

婚約者から逃げちゃうあたりがちよつとヘタレだけど、「迷惑はかけない」って言ってたから、信じてみよう。

さっきのレンの真っ直ぐな目を思い出してしまって、またドキドキしてしまった。

あたし、なんかおかしいかも。

次の日は、学校は休み。

王子は朝早く起きて、お庭を散歩して…っていう勝手なイメージがあったから、レンが12時に起きてきたのには驚いた。

時差ボケとかではなく、特に用事がないときはいつもこの時間らしい。

1日を半分無駄に過ごしてるよ、この人。

王子は早起するイメージで、起きてから朝ご飯ないと失礼かも！と考えて、6時に起きて朝ご飯の準備をしていたあたしの努力は無駄になった。

せめて、起床時間くらい確認しとけばよかった…。

というか、この時間に起きてくる前に1回あたしはレンを起こしている。

なかなか起きてこないから、いつもお付きの人が起こしてるのかと思って、こっそりレンの部屋に入ったのだ。

「レン、朝だよー」…反応ナシ。

「おーい！」「んー…」反応アリ。起きたのかと思うと、ぐろんと寝返りをうつただけだった。

寝ているレンの顔をまじまじと見る。うわ…まつ毛ながっ！

寝ている人を見ると、なんだかいたずらしたくなる。そつと手を伸ばし、寝ているレンの顔をつつく…反応ナシ。

3回くらいつついたけど、3回とも反応ナシだったので、あたしは諦めて部屋を出た。

部屋を出てからも、レンの寝顔を思い出してちょっとにやけてしまったのは秘密。

あたしいつからこんな変な子になっちゃったの？

どうやらレンは、あたしにつつかれたのを覚えてないらしい。覚えられてても、かなり気まずいけど…。

「着替えがない」というレンのために、午後は買い物に行くことになった。

「外に出て、大丈夫なの？昨日みたいに追われちゃうんじゃない？」

「大丈夫でしょ。昨日シオンにメールしておいたし。」そんな話聞いてないよ！ちなみにシオンはレンのお付の人で、身の回りのことをやってくれていたらしい。

「そんなあつさりで大丈夫なの？」

「うん。日本の友達の家が経営するホテルにいるって言うておいたから。」いやいや全然普通のアパートですけど！セキュリティなんてドアの力ギとチェーンだけだよ！

「うち、あまり厳しくないから。とりあえず安全ってことがわかれ
ば、後はシオンがなんとかしてくれるよ。」

ほぼ、シオンに丸投げじゃん！って思ったけど、追っ手に追われる
こともないし、ひとまず平和に過ごせそう。

行き先は、レンの強い希望で、ペンギンマークの大手ディスカウン
トショップになった。

いろんなものが安く売っているという理由で、一部セレブの間では
話題のスポットのようだ。

いろいろ売ってて便利だけど、王子が行くような場所じゃないよ…。

レンは結構喜んでいて「こんなに安かったら、店潰れちゃうんじゃない？」って本気で心配していた。

替えが必要な下着、家にいるとき用のスウェット、クマの着ぐるみ

パジャマを買った。

着ぐるみパジャマは、よくわからないけど「おもしろそうだから着てみたい」っていう理由らしい。そう思っても買わないのが普通。やっぱ王子だからどこかズレてんのかな？

「あー、おもしろかった！」「レンが本当につれしそうに笑うから、あたしもなんだかうれしくなった。

「あれ、莉央じゃん」

店を出たとき、急に名前を呼ばれた。

今、一番聞きたくない声。

元カレ、慎吾だった。

王子と過ごす休日（後書き）

買い物のシーン、少しも膨らませてないですw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4758n/>

王子様といっしょ！

2010年10月19日18時27分発行